

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	葛原 憲治
最終学歴	学 位	専 門 分 野
名古屋大学大学院 教育発達科学研究科博士課程 後期課程修了	博士 (教育)	アスレティックトレーニング

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神および校訓に沿って、真面目に学業に取り組み、主体的な学びと問題解決できる力を養い、社会で信頼される人格の育成をすることを目標とする。また、健康増進に関わる基礎的な知識とトレーナーの基本スキルやエクササイズのコツを修得し、スポーツの競技特性やクライアントのニーズに合ったトレーニングプログラムの構築および処方ができる実践力を身に付けたトレーナーや指導者の育成を目指す。

(計画)

基礎的な知識やスキルの修得や専門的な実践力を身に付けるために、実践や実習に重点を置いた双方向型の授業やアクティブラーニングの手法を用いて実践する。また、学生の学力格差を理解しながら、それぞれの授業テーマに沿って資料提示を工夫し、学生が興味を持てるような授業改善に取り組む。特に、専門演習では、学生に対して個別の対応をしながら、現場実習による主体的な学びと問題解決能力を養い、4年間の学びの集大成である卒業研究につなげる。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) プログラムデザイン、ストレンクス・コンディショニング実習、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) フィットネステスト・評価、アスレチックトレーニング実習、基礎アスレチックトレーニング、総合野外活動実習Ⅲ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

プログラムデザインおよび基礎アスレチックトレーニングの講義において、学生の理解を深めるために動画やブルーレイディスクなどの教材を活用し、実践を含めた内容を授業に盛り込み、さらには授業開始前には前回授業の復習として 13 回のクイズを実施することで教育効果をあげることができた。フィットネステスト&評価の講義において、様々なフィットネステストを実際に実践し、測定検者と測定される被験者をそれぞれ体験することでデータを取り、エクセルを用いてデータ分析することを通して測定方法と評価方法を学びながら学習効果をあげることができた。ストレンクス&コンディショニング実習やアスレチックトレーニング実習において、グループやパートナーで携帯端末機器による撮影を通して、基本動作の確認およびフィードバックによるスキル習得を効果的にできた。総合野外活動実習Ⅲ (スノースポーツ) において、インストラクターによる指導方法および学生個々の活動状況をビデオで撮影し、学生にフィードバックすることでスキル習得をする過程の問題点や改善点を気づかせ、実習ノートによる振り返りを行うことで学習効果をあげることができた。その結果、短期間での SAJ 認定のスキー検定 3 級を 27 名の学生が合格をした。

○作成した教科書・教材

プログラムデザイン、基礎アスレチックトレーニング、フィットネステスト&評価の講義では、

それぞれの講義で用いる教科書をベースに、教科書内容を理解できるような穴埋め式あるいは記述式を含めたオリジナルの教材を作成した。総合野外活動実習Ⅲ（スノースポーツ）において、集中講義期間の学習内容を振り返るための実習ノートを作成し、映像や画像によるフィードバック教材を作成した。

○自己評価

学生の理解度を向上させるために ICT（映像や学生個々の携帯機器を含む）を積極的に活用することで、学生個々にフィードバックが可能となり、多くの実践を含めた授業を展開することで授業改善ができた。また、学力格差がある学生に対して個別指導によって学生の理解力を改善することができた。今後、さらに学生が興味を持ち、かつ、学習効果が高まるような授業改善をすることが必要である。

II 研究活動

○研究課題

ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツなどの傷害分析および傷害予防トレーニングについて

○目標・計画

（目標）

ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツ、ウィンタースポーツの傷害分析および傷害予防トレーニングについて、①ジュニアスポーツの傷害調査および分析、②ジュニアスポーツ選手の基本的な動作や活動量を分析するために Functional Movement Screen（以下、FMS）やアクチグラフ（3次元加速度計）による測定および分析、③コンタクトスポーツ（バスケットボールなど）などの傷害調査および分析、④コンタクトスポーツやエリートスポーツ選手の身体組成およびフィジカル特性の測定および分析、⑤ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツの傷害予防トレーニングやコンディショニング（アクアエクササイズを含む）の研究をすることを目的とする。

（計画）

本年度は、科研の最終年度となり、中学生のジュニアスポーツの傷害調査の分析やアクチグラフによる活動量の分析、そしてコンタクトスポーツ（サッカー、バスケットボールなど）などの傷害予防の研究に取り組む計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・黒田次郎、石塚大輔、萩原悟一、葛原憲治、他 19 名、『スポーツビジネス概論 3』、叢文社、2018 年 4 月。
- ・杉谷正次、石川幸生、藤森憲司、青木葵、葛原憲治『スポーツ・ツーリズムの可能性を探る－新しい生涯スポーツ社会への実現に向けて』、唯学書房、2015 年 12 月。
- ・葛原憲治、吉部紳介、井口順太、石原慎二『スイメックスによるアクアセラピープロトコル』、唯学書房、2015 年 3 月。
- ・佐野昌行、黒田次郎、遠藤利文、谷釜尋徳、矢野裕介、葛原憲治、他 23 名『図表でみるスポーツビジネス』、叢文社、2014 年 4 月。

（学術論文）

- ・山村伸、嶋原礼佳、葛原憲治、「NBA 2017-2018 シーズンにおける勝敗要因に関する研究」、*東邦学誌*、48(2) : pp. 51-70、2019 年 12 月。
- ・葛原憲治、柴田真志、井口順太、「中学生バスケットボール選手における部活動とスポーツ傷害の

- 実態～1年間の前向き研究～」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 26 (6) : pp.16-22、2019年(査読有)。
- Iguchi J, Kuzuhara K, Katani K, Hojo T, Fujisawa Y, Kimura M, Yanagida Y & Yamada Y. Seasonal changes in anthropometric, physiological, nutritional and performance factors in collegiate rowers. *Journal of Strength and Conditioning Research*, 2018 (査読有、published ahead-of-print).
 - 木野村嘉則、小島正憲、葛原憲治、「DARTFISH を用いて算出した上肢および下肢関節角度の信頼性と妥当性:倒立動作の2次元動作分析を事例として」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 25 (4) : pp.12-18、2018年(査読有)。
 - Kuzuhara K, Shibata M, Iguchi J & Uchida R. Functional movements in Japanese mini-basketball players. *Journal of Human Kinetics*, 61: pp.53-62, 2018 (査読有)。
 - Kuzuhara K, Shibata M & Uchida R. Injuries in Japanese junior soccer players during practice and games, *Journal of Athletic Training*, 52(12): pp.1147-1152, 2017 (査読有)。
 - 木野村嘉則、木下達生、波戸謙太、葛原憲治、「野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案:中学生及び高校生による自由走路選択条件を事例として」、*東邦学誌*, 46 (2) : pp.93-104、2017年12月。
 - Kuzuhara K, Shibata M & Uchida R. Injuries in Japanese mini-basketball players during practice and games. *Journal of Athletic Training*, 51(12):pp.1022-1027, 2016 (査読有)。
 - 葛原憲治、長谷川望、中野匡隆、「スキー・スノーボードの傷害およびその予防対策」、*東邦学誌*, 45(2) : pp.15-24、2016年12月。
 - Iguchi J, Watanabe Y, Kimura M, Fujisawa Y, Hojo T, Yuasa Y, Higashi S & Kuzuhara K. Risk factors for injury among Japanese collegiate players of American football based on performance test results. *Journal of Strength and Conditioning Research*, 30(12):pp.3405-3411, 2016 (査読有)。
 - 葛原憲治、柴田真志、「ジュニアスポーツにおける傷害予防プログラム」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 22 (4) : pp.2~11、2015年5月(査読有)。
 - Hasegawa N & Kuzuhara K. Physical characteristics of collegiate women's football players. *Football Science*, 12 : pp.51-57, 2015 (査読有)。
 - 葛原憲治、芝純平、「東海学生アメリカンフットボール1部リーグチームにおける身体特性および体力特性について ~他大学1部リーグチームと比較して~」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 21 (1) : pp.8-13、2015年1-2月(査読有)。
 - 澤田節子、古市久子、葛原憲治、寺島雅隆、高間佐知子、「本学学生の意識調査から授業改善を目指して -アクティブ・ラーニングは効果的な学習の救世主となりうるか-」、*東邦学誌*, 43 (2) : pp.141-159、2014年12月。
 - 葛原憲治、「筋の不均衡を改善するためのパートナーストレッチング」、*日本保健医療行動学会誌*, 28 (2) : pp.44-48、2014年2月。
 - Iguchi J, Yamada Y, Kimura M, Fujisawa Y, Hojo T, Kuzuhara K, & Ichihashi N. Injuries in a Japanese division 1 collegiate American football team: A 3-year prospective study. *Journal of Athletic Training*, 48(6): pp.818-825, 2013 (査読有)。
 - 葛原憲治、黒田次郎、「プロ野球選手の身体特性および体力特性について」、*東邦学誌*, 42(1) : pp.59~65、2013年6月。
 - 葛原憲治、井口順太、井上鎮子、間瀬泰克、「bjリーグにおけるプロバスケットボールチームの傷害分析～3年間の前向き研究～」、*日本臨床スポーツ医学会誌*, 21 (1) : pp.187~193、2013年

(査読有).

- 葛原憲治、柴田真志、「急性傷害にコールドスプレーを使ってはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (8) : pp. 10~12、2013年10月.
- 葛原憲治、柴田真志、「集中練習ばかりを繰り返してはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (4) : pp. 10~12、2013年5月.
- 葛原憲治、柴田真志、「1年中休みなく同じスポーツをしてはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (1) : pp. 10~12、2013年1-2月.
- 葛原憲治、井口順太、柴田真志、「大学アメリカンフットボールチームの下肢傷害分析~2年間の前向き研究~」、*体力科学*, 61 (1) : pp. 139~145、2012年 (査読有).
- 葛原憲治、「単なる早期専門化をやってはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 19 (10) : pp. 16~17、2012年12月.

(学会発表)

- 「国際指標を用いたスキー・スノーボードの傷害分析」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2019、神戸ファッションマート、2019年12月
- ” The comparison of physical performance characteristics of Japanese American collegiate football players by divisional level” (Iguchi J, Hojo T, Fujisawa Y, Kuzuhara K, Yasuhiro Y, Minoru M), 第24回 European College of Sport Science, プラハ、チェコ、2019年7月.
- 「中学生バスケットボール選手における練習時の活動強度」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2018、日本科学未来館、2019年1月
- 「中学生バスケットボール選手における傷害発生率の男女比較について~1年間の前向き研究~」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、東海体育学会第66回大会、愛知東邦大学、2018年10月
- ” Physical and performance characteristics of Japanese division II female collegiate basketball players” (Iguchi J, Satou A, Hojo T, Fujisawa Y, Kuzuhara K), 第23回 European College of Sport Science, ダブリン、アイルランド、2018年7月.
- 「中学生バスケットボール選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2017、神戸ファッションマート、2017年12月
- 「構造か指導か：学校プールにおける飛び込みスタートの事故に関する包括的研究」(内田良、井口成明、村田祐樹、葛原憲治)、日本体育学会第68回大会、静岡大学、2017年9月
- 「初心者倒立における評価指標の提案~体育授業における倒立運動の評価を目指して~」(小島正憲、葛原憲治、木野村嘉則)、日本体育学会第68回大会、静岡大学、2017年9月
- “Functional movements in Japanese mini-basketball players” (Kenji Kuzuhara, Masashi Shibata, Junta Iguchi, Ryo Uchida), 第5回 NSCA カンファレンス、幕張メッセ国際会議場、2017年1月
- 「スキー・スノーボードにおける死亡事故の分析」(内田良、福田修、野地雅人、葛原憲治、村田祐樹)、第27回日本臨床スポーツ医学会学術集会、幕張メッセ国際会議場、2016年11月
- 「小学生ミニバスケットボール選手はジュニアサッカー選手に比べて傷害発生率が高い」(葛原憲治、柴田真志、大前拓)、東海体育学会第63回大会、愛知県立大学、2015年10月
- 「小学生ジュニアサッカー選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志、杉谷正次)、第19回日本体力医学会東海地方会学術集会、名古屋大学、2015年3月
- 「小学生ミニバスケットボール選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志)、東海体育学会第62回大会、岐阜大学、2014年10月
- 「大学におけるサッカーを通じた地域活性化への取り組み ~地元Jクラブとの連携に向けて~」

(長谷川望、葛原憲治、御園慎一郎)、地域活性学会第6回研究大会、東京農業大学オホーツクキャンパス、2014年7月

- ・「プロスポーツの社会貢献活動の国際比較(その3) -日米のプロ野球における社会貢献活動-」(平本譲、黒田次郎、葛原憲治、古城隆利)、日本運動・スポーツ科学学会第21回大会、玉川大学、2014年6月
- ・「日本プロ野球の球団経営に関する研究-チーム成績・賃金・観客動員数の関係から-」(黒田次郎、内田勇人、平本譲、葛原憲治)、日本運動・スポーツ科学学会第20回大会、神奈川大学、2013年6月
- ・「スポーツ・ツーリズムの可能性を探る-生涯スポーツとしての「グラウンド・ゴルフ」発祥地大会を事例として-」(杉谷正次、石川幸生、青木葵、御園慎一郎、杉浦利成、葛原憲治)、日本生涯スポーツ学会第14回大会、広島経済大学、2012年10月

(特許)

なし

(その他)

- ・葛原憲治、「トップアスリートから学ぶフィジカルトレーニング〜プロ野球オリックス・ラグビー神戸製鋼・アイスホッケーコクドのトレーナー経験より〜」、奈良県臨床整形外科医会会報、Vol. 36、pp. 16-18、2019年.
- ・葛原憲治、長谷川明、増田貴治、山本正彦、吉岡睦博、「第6章 三大事業の集中実施」、東邦学園九十年誌、学校法人東邦学園、2014年5月
- ・葛原憲治、「ゴルフボールで柔軟性アップ」、みどりの風、第34号、pp. 10~11、2013年1月
- ・葛原憲治、「強みを伸ばす場をつくって待つ」、月刊トレーニングジャーナル、pp. 22~25、2012年7月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・2019年度 人文・社会科学系学術研究助成(公益財団法人 大幸財団)「高校生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明とその予防対策の研究」の研究課題で申請(研究代表者) -採択
- ・2019~2021年度 科学研究費補助金 基盤研究C(独立行政法人日本学術振興会)「高校生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で申請(研究代表者) -不採択
- ・2017~2019年度 科学研究費補助金 基盤研究C(独立行政法人日本学術振興会)「大学スポーツの傷害分析とパフォーマンステストを用いた予防プログラムの開発」の研究課題で交付(共同研究者) -3年目
- ・2016~2018年度 科学研究費補助金 基盤研究C(独立行政法人日本学術振興会)「中学生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で交付(研究代表者)
- ・2013~2015年度 愛知東邦大学地域創造研究所共同研究「新しいスポーツ・ツーリズムの可能性を探る」(共同研究者)
- ・2013~2015年度 科学研究費補助金 基盤研究C(独立行政法人日本学術振興会)「小学生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で交付(研究代表者)

○所属学会

日本体力医学会、日本体育学会、全米アスレティックトレーナー協会(NATA)、全米ストレングス&コンディショニング協会(NSCA)、ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構(JATO)、日本臨

床スポーツ医学会、日本フットボール学会

○自己評価

本年度は、3年間の科学研究費によるジュニアスポーツ選手の傷害発生に関する研究成果として、ジュニアスポーツの傷害予防に関わる研究論文を発表することができた。次年度に向けて引き続きジュニアスポーツ選手の傷害予防に関する研究を実施していきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

全学委員会およびワーキンググループに関わって大学運営に貢献する。

(計画)

学生委員会の委員長として初年度なので、これまでの学生委員会で議論されてきた課題や問題点を引き継ぎ、それらを改善するために取り組む。

○学内委員等

運営委員会委員、キャリア支援委員会委員長、愛知東邦大学トレーナー組織 (ATTO) 顧問

○自己評価

キャリア支援委員会委員長として初年度となり、これまでのキャリア支援委員会で議論されてきたいくつかの課題や問題点について議論し、それらを改善するために取り組んだ。特に、各学部におけるキャリアマップの作成に取り組み、出口戦略の一助として貢献した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

建学の精神および校訓に沿って、本学園が実施している地域向けの公開講座や地域イベント、高大連携事業に積極的に関わる地域貢献をする。

(計画)

大学祭や名東区民祭りにおける地域向けの健康増進イベント、高大連携事業として各高校への出張講義や模擬授業や東邦高校との総合学習 (1・2年)、に協力しつつ、学生と積極的に関わりながら企画運営および実践を行う。

○学会活動等

・NSCA ジャパン理事 (認定試験・CEU 担当) 2015年6月～現在

○地域連携・社会貢献等

・第24回名東の日・区民まつりにて健康企画「リラクゼーションマッサージ」を実施 2019年5月

・NHK「パラ×ドキッ!」の番組においてプロ野球選手のデータを紹介 2019年8月

・2019年度「和丘祭」のATTO (愛知東邦トレーナー組織) イベントとして「リラクゼーションマッサージ」を実施 2019年11月

・第23回全国学生トレーナーの集い (大阪体育大学熊取キャンパス) のオブザーバーとして参加 2020年3月

○自己評価

本年度において、6年前に発表したプロ野球選手に関する研究論文のデータがNHKの番組で活用

された。研究活動による成果がパラアスリートのためにメディアで活用されたことは非常に喜ばしいことである。地道な研究活動が、このような社会貢献につながることを改めて認識することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

本年度は、特に研究活動に積極的に取り組むことができた。研究活動については、科学研究費におけるジュニアスポーツの傷害予防に関する研究成果をあげることができた。今後、ジュニアスポーツの傷害分析および傷害予防トレーニングの研究を継続し、さらなる研究成果につなげたい。

以 上